時評

ふたつの短歌甲子園

田中拓也

今年の八月、ふたつの短歌甲子園が開催される。ひとつは岩手県盛岡市で開催される「第七回全国高校生短歌大会　短歌甲子園二〇一二」。もうひとつは宮崎県日向市で開催される「第二回牧水・短歌甲子園」である。私は前者の岩手県盛岡市の「短歌甲子園」には第二回・第三回大会に引率教員として、第四回以降は審査員として参加している。そのため、参加者である教員・生徒の立場と、審査員や開催する側の立場の双方がわかる一人として「歌壇」や「短歌研究」などの総合誌の場で発言を重ねてきた。

「短歌甲子園」の特徴は従来の「コンクール」とは異なる「読み」の「場」が生まれている点にある。従来の「コンクール」の多くは「選者」と「投稿者」の枠組みが固定されており、「投稿者」は「選者」に選ばれるか否かだけの関係であった。だから、選ばれた場合に「選者」の評がもらえる場合もあるが、基本的には「入賞」「作品掲載」で完結する世界であった。しかし、「短歌甲子園」では盛岡市・日向市のいずれも参加者である高校生に発言の時間が設けられており、会場内に「読み」の場が生まれている。双方の短歌をそれぞれ比較し、どちらが「勝」かを競いあうスタイルは「歌合」の伝統に通じており、「勝」「負」を判断する審査員には「読み」の力が求められてくる。私自身、引率教員として生徒たちと参加していたときは、審査員の「読み」に一喜一憂し、時には生徒たちと審査員の「読み」について真剣に話し合っていたものである。そして、審査員になってからは「勝」「負」を決めるからには、「歌会」とは違う緊張感を味わうようになった。

また、ふたつの大会ともに参加者である高校生たちが短歌を通して交流できるという点も大きな意義がある。盛岡市の短歌甲子園に関して言えば、参加者のほとんどが文芸部に所属している生徒であり、ふだんはあまり他校と交流する機会が持てない場合が多い。ごく一部では学校間の交流が盛んな県や地域もあるがそれは例外と言ってよい。そんな中で短歌甲子園が果たす役割はきわめて大きいものと言えるだろう。最近、短歌甲子園を経験した生徒たちの中で、大学の短歌会に入ったり、結社に入ったり、新人賞に応募したりという人が増えてきている。私は「歌壇」という枠ではなく、文化史という視点からみても短歌甲子園が短歌を広め、伝えていく一つの「場」として有機的に機能していくことを期待している。前者の大会には石川啄木、後者の大会には若山牧水の顕彰という意味合いもある。当然、十年・二十年・三十年という長いスパンで考えていけば、地域振興という意味合いも大きいと思う。

ふたつの短歌甲子園が東北と九州と離れた地域であるため、参加校にも違いが出ており、どんな作品が生み出されるか楽しみである。いずれ、それぞれの上位入賞チームが京都・大阪・東京などで「激突」する場を設けるのもおもしろそうである。今年の熱戦に注目したい。